

園庭におけるままごと遊びの環境構成と遊びの変化

村上 智子*

(2020年1月7日 受理)

Changes in the Environmental Configuration and Children's Playing House in Playgrounds

Tomoko MURAKAMI*

This paper examines configuring the environment for children's playing house and discusses the changes in the environmental configuration of playgrounds and consequent changes in children's play. To summarize, five elements of the environmental configuration that make playing house at the playground more enriching are pointed out:

1. to build various kinds of base spaces
2. to provide children with authentic play equipment and apparatus
3. to make storage shelves for tidying up
4. to make natural things available for children
5. to not necessarily bring base spaces closer to drinking fountains

Moreover, in order to reconfigure the physical environment, the importance of teachers who appropriately observe children's playing activities cannot be dismissed.

Keywords: children 幼児, playground 園庭, playing house ままごと, environmental configuration 環境構成

1. はじめに

2006年、文部科学省は全国協議会を設立し、「早寝早起き朝ごはん」国民運動を推進してきた。しかし、子どもの生活リズムは保護者の生活リズムに影響を受けるため、夜型化した社会では子どもの生活リズムの改善につながりにくい現状があった。同じ頃、子どもの遊び環境の要素である時間・空間・仲間が減少する「三間の喪失」が言われるようになり、子どもの遊びの環境も悪化していた。

そこで、生活リズムの主要素（睡眠、食事、運動）の一つである運動と、遊びの三間である時間・空間・仲間がそろっている園での生活に着目し、幼児が在園している時間帯に保育者が取り組むことができることはないかと思案を始めた。保育の主活動の時間帯である午前中に戸外遊びをすることで、体温の日内変動の幅を広げ、生体リズムが整っていくことを踏まえ、幼児が戸外遊びをしたくなる園庭を追求することで、幼児の生活リズムの改善に寄与できるのではないかと考えるに至った。

2. 研究の経緯と方法

2015年に山形県酒田市の社会福祉法人十坂協会十坂保育園（2017年に幼保連携型認定こども園に

* 広島女学院大学人間生活学部児童教育学科准教授

移行。十坂こども園に名称変更)園長の上野菜穂子氏より、「園児の生活リズムを整えるために外遊びを充実させたい。そのために、園庭の環境を改善したいと考えている」旨の話をいただいた。まず、2015年11月30日に同園を訪れて園庭の現状と課題、園長のお考え等を把握し、筆者の保育参観と園内研修を断続的に行いながら、少しずつ園庭の環境を改善していくことになった。

これ以降、年に数回、同園の午前中の園庭での幼児の遊びの観察を行い、同時に、午後は園内研修を行っている(園内研修は、上野菜穂子氏と親交のある近藤浩司氏が園長を務める社会福祉法人中平田協会中平田保育園との2園合同で行っている)。園内研修は、午前中の幼児の遊びの様子を振り返りながら、幼児の遊びの捉え方、園庭の環境の改善箇所の検討を行うなど、保育者の研鑽を積むことを目的とした。

また、2018年から同園は本格的に園庭の環境改善に着手し、園庭の環境づくりの専門家である木村歩美氏(おおぞら教育研究所代表、保育環境研究家)と井上寿氏(Integral Design Studio代表、一級建築士、こども環境アドバイザー)の助言の下、既存の固定遊具の改善や撤去、新規の遊具設置をしてきている。

このように徐々に環境が変化しつつある園庭において、幼児の遊びがどのように変化しているのかを追ってみていくことにした。同園は日本海沿岸近くに立地しているため園庭は全体的に砂地であり、至る所で砂遊びが繰り広げられている。特に、溝や穴を掘って水を流す遊び、砂を用いたままごと遊びは同園の定番の遊びである。園庭の環境づくりで、ままごと遊びの拠点をどこに、どのように設定するかが、同園の保育者を含め筆者の関心どころであったため、本研究では、ままごと遊びを中心に環境構成の変化と幼児の遊びの変化から、ままごと遊びの環境づくりの一考察を試みることにした。なお、同園の園庭は園舎の前(南側、主に3歳以上児が遊ぶ空間)、横(西側、やぎのゆきちゃんの飼育小屋がある空間)、後(北西側と北東側、主に3歳未満児が遊ぶ空間)、さらに畑もあり広大であるため、前庭を中心にみていくことにした。

3. 事例と考察

園への訪問日に沿って、ままごと遊びの拠点となった園庭の環境と幼児の遊びの様子を以下に示した。

① 2015年11月30日

主なままごと遊びの拠点のひとつは、収納棚近くの机と椅子のある空間であった(写真①-1)。この空間は地面に埋められたタイヤで他の空間と区切られており、ままごと遊びの空間として確保されていた。ふたつめは、この空間の近くにある固定遊具の上部であり、こども机と椅子のある空間であった。この2つの空間は、いずれも「机と椅子」が組み合わせられたもので、4~5人の集団で遊ぶ空間の広さである。使用している道具や小物は、樹脂製の子ども用のものであった。

幼児の遊びの様子をみると、遊び始めから断続的に道具や小物、砂や水を運ぶ姿があった(写真①-2)。また、友達とイメージを共有して遊んでいるが、容器に砂を入れる、かき混ぜる、が中心であった。空間が狭い固定遊具の上部では、遊びに加わりたいたいと思っても入ることができず、遊びの集団規模が広がりにくいように思われた(写真①-3)。また、遊びの時間が終わり、当番の幼児が片づけを始める時には、固定遊具の上部には使用した道具や小物がそのまま残っていることが多かった(写真①-4)。



写真①-1



写真①-2



写真①-3



写真①-4

後にままごと遊びの拠点となる元飼育小屋は、この時は物置であったため、園庭の中心に位置しているにもかかわらず、まったく活用されていない空間であった（写真①-5）。園長の上野氏にとっても懸案となっていた場所であった。そのため、この小屋の中の物を片づけて、子どもたちの遊び場として開放することにした。

② 2016年6月24日

片づけた小屋の中に、棚やキッチンカウンター、机と椅子、炊飯器などを置いた（写真②-1）。しかし、幼児が遊ぶには、道具や小物の数や種類が十分でなかった。したがって、この日のこの空間での遊びは、数名の幼児が中に入ってきて遊び始めようとする姿が見られたが、遊びに至らなかった。



写真①-5



写真②-1

③ 2016年9月2日

小屋の横に机と椅子を置いた(写真③-1)。小屋の裏にあるログハウスの通路の手すりもままごと遊びの拠点となった(写真③-2)。拠点の空間の広がりによって、ままごと遊びをする幼児の集団規模は大きくなった。



写真③-1



写真③-2

小屋の中がままごと遊びの拠点となることを期待していたが、小屋の内部に置かれた道具や小物の数は十分とはいえず、遊び始めの時間帯には小屋に入ってくるが、小屋の中での遊びは持続しなかった(写真③-3)。時間が経つと幼児は小屋の外へ出ていき(写真③-4)、残った数名がまったりとした時間を過ごすという様子が見られた(写真③-5)。小屋の中は他の遊びの空間から隔たれた空間であり、幼児が心と体を落ち着かせることができる場になっていた。

この頃、保育者からは「小屋の屋根が低く、腰を曲げて中に入る必要がある。頭をぶつけることも多く、あまり中に入りたくない」という言葉が聞かれた(写真③-3, 6)。小屋は、縦180cm×横840cm×高さ130cmで、幼児にとっては遊ぶ空間になっていたが、おとなにとっては入りにくい大きさであった。そのため、保育者からこの空間を積極的に活用しようという流れができにくい状況であった。



写真③-3



写真③-4



写真③-5



写真③-6

④ 2016年11月18日

小屋を活用するためのアイデアがないまま棚を置いてみたり、移動させたりするが、この中で遊ぶ幼児の姿は見られず、遊びの空間とはなっていなかった(写真④-1, 2)。保育者は小屋での幼児の遊ぶ姿のイメージを抱くことができず、しばらく、環境の再構成が迷走したままの状況が続いた。



写真④-1



写真④-2

⑤ 2017年8月29日

保護者の協力を得て、園にはフライパン、鍋、やかん、ボウル、おたま、フライ返し、水筒、炊飯器、トースターなど本物の調理道具や器具がたくさん集まった。安全性を確かめた後、小屋に棚を置き、並べて収納した(写真⑤-1)。すると、幼児が小屋の中でさまざまな道具や器具を使いこなす様子が見られた(写真⑤-2)。また、本物の道具や器具が増え、多彩になったため、より具体的なイメージを持って、長い時間持続してままごと遊びをする幼児の姿が見られた。何度も何度も繰り返し道具の操作を楽しみながら、集中して遊んでいた(写真⑤-3, 4, 5)。

特に、喫茶店にあるような水注ぎのポットから製氷皿の穴ひとつひとつに器用に水を注ぐ姿は、職業人のものであった(写真⑤-6)。また、炊飯器に電気コードをつなげたい幼児は、キッチンカウンターから引っ張ってきたコードの挿し口を探していた(写真⑤-7)。炊飯器は電気コードを差して使用するものだという事は理解しており、日常生活の再現を試みている姿があった(しかし、炊飯器側のコードをキッチンカウンターの差し口に差すという事は理解していないようであった)。

遊びの終わりには、キッチンカウンターの扉のある棚は冷蔵庫のイメージとなり、水の入った水筒を片づける様子が見られた(写真⑤-8)。道具や小物が増えたが、遊びの拠点と収納場所がおなじ

空間となり、ままごと遊びのイメージのまま片づけができていた。したがって、以前のように園庭のあちこちに散らばってしまうということにはなかった。

この日の小屋の中でのままごと遊びは、午前中の園庭での自由遊びの時間帯、初めから終わりまで続いていた。小屋の右側の空間には、キッチンカウンターや棚を置き、道具や小物が収納されていた。そのため、幼児は台所での家事というイメージを持ち、道具や小物を持って、砂地の小屋の左側に移動して遊んでいた。このように、幼児が長い時間、集中してままごと遊びを続けることができたのは、保育者と幼児の小屋での遊びのイメージが一致し、幼児にとって遊びに十分な環境として整ったからである。しかし、小屋の左側の後方の砂地部分は、砂が流出していくため環境を整えにくい空間であり、砂場のような利用のされ方をしていた。この空間の環境をどのように構成していくかが課題として残った。



写真⑤-1



写真⑤-2



写真⑤-3



写真⑤-4



写真⑤-5



写真⑤-6



写真⑤-7



写真⑤-8

この日のもうひとつのままごと遊びの拠点は、固定遊具の上部であった。幼児は上がって遊ぶようになるが(写真⑤-9)、多くの幼児で遊ぶ空間の広さではなかった。この日の遊びは、遊びの人数の増減を繰り返しながら、最終的には4人程度に落ち着いた(写真⑤-10)。固定遊具の上部は、小さな規模の集団でイメージを共有して集中して遊ぶには適した空間であるが、幼児の遊びの集団規模が広がろうとした時、空間的な広さに限りがあるため対応できない。ままごと遊びが展開していくようにするためには、広がりのある空間の設定が課題となった。



写真⑤-9

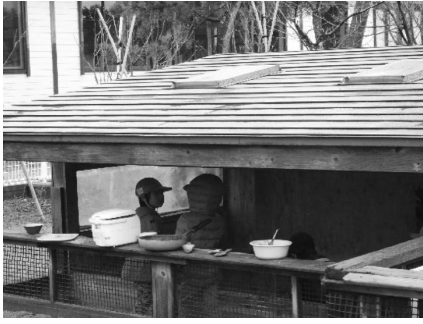


写真⑤-10

⑥ 2018年3月22日

同園は日本海沿岸に位置するため風が強く、この日は3月末でもまだ寒かった。風と寒さをしのぐために、小屋や屋根のある固定遊具に入って遊ぶ幼児の姿が見られた(写真⑥-1, 2)。

この小屋については何度となく保育者から壊したいという希望が聞かれたが、筆者の提案で子どもたちに開放して様子を見ようということになり、環境の再構成を繰り返しながら、これまで活用してきた。しかし、園庭は砂地で、かつ、水はけが悪く、雨が降ると小屋周辺は水たまりができる(写真⑥-3)。さらに、木の土台は腐敗し、コンクリートの土台はむき出しになってきたため(写真⑥-4)、ますます保育者の環境づくりのモチベーションは上がりにくくなり、安全面も含めて幼児の遊びの拠点として思うように活用できなくなってきた。そしてこの後、遂に小屋が撤去された。



写真⑥-1



写真⑥-2



写真⑥-3



写真⑥-4

⑦ 2019年9月3日

これまでままごと遊びの拠点であった小屋といくつかの固定遊具が撤去されたため（写真⑦-1）、幼児たちが可動遊具を運んできて作っていった空間や、事前に保育者が可動遊具で作った空間、新たに設置された屋台（写真⑦-2、井上寿氏が設計）、がままごと遊びの拠点となった。道具や小物は収納棚から各拠点に運んでいた（写真⑦-3、4）。



写真⑦-1



写真⑦-2

園庭におけるままごと遊びの環境構成と遊びの変化



写真⑦-3



写真⑦-4

幼児が運ぶことができるL字型パネル(写真⑦-5)、バスマットなどの可動遊具を組み合わせる空間はいかようにも広がる可能性がある。この日も朝の遊びが始まった拠点から、次々に登園した子どもたちが遊びに加わり、可動遊具を組み合わせる拠点を広げていた(写真⑦-6)。また、他の遊びをしていた幼児も加わることもあり(写真⑦-7)、遊びの集団規模が大きくなっていく様子が見られた(写真⑦-8)。これまで同園ではあまり可動遊具の活用はされてこなかったが、合同で園内研修をしている中平田保育園では、長年、バスマット、風呂用いす、ステップ(木製の踏み台)などが遊びの環境として積極的に活用され、幼児にも遊具として定着していた。これらの遊具は、園内研修を通して可動遊具の可能性と活用方法を学んだ保育者によって導入された。



写真⑦-5



写真⑦-6



写真⑦-7



写真⑦-8

事前に保育者がベニヤ板、ビールケースなどで作っていた空間では、2人の3歳女児がイメージを共有しながらままごとを楽しんでいた(写真⑦-9)。一角に置かれたトースターに容器を入れ、扉を閉めて、開けて、容器を出す、という一連の流れを、さまざまな容器に砂を入れては繰り返していた(写真⑦-10)。料理とは、お皿に盛るだけでなく調理するものである、ということを幼児はイメージしているようであった。



写真⑦-9



写真⑦-10

この日、新たに設けられた屋台とその周辺は、テーブルや椅子と組み合わせた広がりのある空間になっていた。子どもたちは屋台の中と外で、砂を用いてお店屋さんごっこをしていた(写真⑦-11)が、周辺のテーブルの空間での遊びとはつながっていなかった。一方、周辺に草花が多くある横庭に置かれた屋台では、朝顔の花を使った色水遊びをしていた。まず、屋台の中に入った4歳児が色水遊びを始め、それを見ていた2歳児も屋台の外側から色水遊びに加わった(写真⑦-12)。この2つの事例は、屋台の周辺にある自然環境によって遊びの内容が異なることを示している。保育者は、屋台を周辺の自然環境を加味した場所に設置し、その自然環境と幼児がどのように関わるのかを想定した道具や小物(すり鉢、すりこぎ棒、やかん、ペットボトルなど)を準備していた。



写真⑦-11



写真⑦-12

前庭の保育者が木製のベンチやワイヤーラックを組み合わせた空間では、2歳児が、ままごと遊びをしていた。保育者が幼児の遊ぶ様子を見守ることもあったが(写真⑦-13)、多くの時間は、幼児がひとりで集中しておたまで砂をすくってフライパンに入れたり(写真⑦-14)、フライパンのなかに入っている草をパスタサーバーですくったり(写真⑦-15)、を繰り返していた。近くに置いていた電気ポットに興味を持った幼児は、注水ボタンや持ち手を何度も触って操作しようとしていた(写真⑦-16)。

低年齢児にとっても本物の道具や器具は魅力的なものであった。おとなが使っているものを使いながら、というのは日常よく見かける幼児の姿である。幼児が道具や器具をおとなが使っているように忠実に再現して使いこなしている姿から、生活者として育とうとしている幼児のたくましさが見てとれた。



写真⑦-13



写真⑦-14



写真⑦-15



写真⑦-16

この日、5歳児は行事の練習のため、園庭には午前中の遊びの時間の後半に出てきた。ままごと遊びの拠点は他の年齢の幼児が使っているため、大型固定遊具（写真⑦-17）の上部に道具を運んで遊び始めた（写真⑦-18）。



写真⑦-17



写真⑦-18

⑧ 2019年9月5日

この日は初め、ひとりの2歳男児が屋台で遊び始めた（写真⑧-1）。しばらくすると、女児が興味

を持って近づいてきて遊びに加わると（写真⑧-2）、しだいに他の幼児も遊びに加わり、屋台の中に入ってきた（写真⑧-3）。お店屋さんのイメージで遊びが展開したため、保育者はお客さん役になった（写真⑧-4）。さらに興味を持った幼児が加わったため、屋台周辺は混雑しはじめた（写真⑧-5）。屋台は、縦 100 cm×横 120 cm×高さ 120 cm の大きさであり、中には木製のベンチが置いてあった（写真⑧-6）。したがって、屋台の中は狭く、入りたい幼児が入ることができず、場所を争う場面があった。

屋台では、カウンターを挟んでやり取りをする遊びになりやすく、保育者もそこに注目しやすいが、屋台の内側の幼児の動きにも注目する必要がある。中に置いたベンチは、幼児が座るものなのか、道具や小物を置いて調理をする台なのか、幼児の遊ぶ姿を観察して環境の再構成をしたい。また、遊びの集団規模が広がるようであれば、周辺のテーブルや椅子も組み合わせて遊びの空間を広げていくことも必要かもしれない。



写真⑧-1



写真⑧-2



写真⑧-3



写真⑧-4



写真⑧-5



写真⑧-6

⑨ 三瀬保育園（2019年9月6日）

社会福祉法人三瀬保育会三瀬保育園は山形県鶴岡市にあり、十坂こども園がある酒田市を含めた庄内地方でいち早く園庭の環境改善に着手していた（十坂こども園の園庭環境の改善の意向を伺ったのは、三瀬保育園で行われた木村歩美氏、井上寿氏を講師に迎えた園庭研修会の時であった）。

この園では、遊びの拠点ごとに小さな収納棚を設け、さらに、幼児が片づけたくなる工夫をしている。ままごと遊びを始める際に、主なる棚（写真⑨-1）から小物を運んで各拠点に行くが、遊びの最中に使い終わったものをもとの棚に戻すのは難しい。したがって、幼児は使い終わったものをその棚に置くということを想定して、幼児が小物を持っていくであろう遊びの拠点ごとに棚を設けることによって、無意識に「片づける」ことができるようにしているのである。

園長の本間日出子氏によると、「水道口からホースを引いて設けられた水場に、収納棚から道具や小物を持って来た幼児が水遊びを始めた（写真⑨-2、3）。しかし、次の遊びに移行する時点で持ってきたものは水場付近に置きっぱなしになってしまうため、水場の後方に小さな棚を設けたところ、幼児が使ったものをその棚に置くようになった（写真⑨-4）」とのことであった。



写真⑨-1



写真⑨-2



写真⑨-3



写真⑨-4

4. まとめ

これまでの事例から、園庭におけるままごと遊びをより豊かにする環境の構成要素について、以下の5つにまとめた。

1つめは、拠点となる空間を複数、数種類、設けることである。園庭では至る所でままごと遊び

が展開されていた。また、遊びの集団規模（人数）も異なる。さらに、幼児の遊ぶ様子は、①ひとりで道具の操作を楽しむ、②イメージは共有しているが遊びは個々で独立している、③イメージを共有して役割を演じてやり取りをしながら遊ぶ、など、さまざま見られた。集中と広がりキーワードに、小屋や屋台、机や椅子が置かれた空間、パネルやバスマットなどの可動遊具を用いて作る空間など、拠点を多彩にすると、幼児がイメージしているままごと遊びに沿った空間が構成できると思われた。

2つめは、本物の道具や器具を取り入れることである。樹脂製の子ども用ままごと道具を用いた際には見られない、複雑で巧みな道具の扱い方、現実に近い調理工程、が見られた。幼児は生活者として生き、生活者として育っていく。日頃から周囲のおとなが道具や器具を用いている姿をよく観察しており、ままごと遊びでそれを再現して使い方を体得している。本物の道具や器具を取り入れた当初は、3歳以上児の使用を想定して設置したが、しだいに、2歳児、1歳児も用いて遊ぶ様子が見られるようになった。その姿は既に生活者であった。もちろん、遊びの場に提供する前の安全性の確認は欠かせない。

3つめは、片づけを想定した収納棚を設けることである。片づけは幼児期に身につけておきたい生活習慣の一つである。しかし、幼児は遊びへの興味が、突然、別の遊びへと移り、その瞬間に身体も次の遊びへと移行するため、使っていたものをその場に置いたままにしてしまう。収納の基本は、使う場所に使うものを収納する、である。遊びの拠点ごとに、幼児が片づけたくなる・思わず片づけてしまう工夫をした収納棚を設けたい。また、保育者にとっても片づけやすい、ことも大切である。

4つめは、砂、石、草、葉、花、木、木の実、などの自然物を幼児が自由に使えるようにしておくことである。素材を組み合わせることで生じる現象に気づき、作りたいものをイメージして作る創造力を発揮して遊ぶことができる。

5つめは、拠点となる空間と水場は必ずしも近くなくてよいことである。ままごと遊びに水は必需品であり、水場が遠くにあっても、幼児は容器を持って水場に行き、なみなみと注いだ水をこぼさないように慎重に歩いて戻ってくる。その姿から、昼食時にお茶を注いだコップを運ぶ姿、汁物のお椀を運ぶ姿を連想する。したがって、ままごと遊びの拠点と水場を行き来する、この過程も大切にしたい。



写真⑩（事例⑤の時の様子）

5. おわりに

本研究では、幼児が戸外遊びをしたくなる園庭の環境を捉える第一弾として、ままごと遊びを取

り上げた。空間、道具、素材などの物的環境を中心に述べてきたが、保育においては、これらの物的環境とともに、保育者も人的環境として大切な環境の一つである。仙田（1998）は、あそび環境の4要素として、あそび時間・あそび場・あそび集団（時間・空間・仲間である三間）に、あそび方法を加えている。園において「あそび方法」を演出するのは保育者である。秋田（2015）は「園庭（という名称、筆者追記）に込めた意味は、子どもが主体的に繰り返しかわれる場であることや、5領域のさまざまな教育的機能を総合的に実現するための環境であるという点」であると述べている。したがって、幼児にとって魅力的な環境、遊びの質を高める環境、の背後には、毎日園庭で繰り返されている幼児の遊びを的確に捉えて、常に物的環境を再構成させていく、幼児の遊びに関わっていく、保育者の存在が欠かせないことは言うまでもない。

謝辞

本研究を遂行するにあたり、ご指導・ご助言いただきました、社会福祉法人十坂協会十坂こども園園長上野菜穂子先生、社会福祉法人中平田協会中平田保育園園長近藤浩司先生、さらに、社会福祉法人三瀬保育会三瀬保育園園長本間日出子先生、をはじめ、3園の職員のみなさま、園児たちに感謝申し上げます。

引用文献

- 秋田喜代美 統 保育のみらい～園コンピテンスを高める～ ひかりのくに 2015 p. 12-13
仙田満 Play Structure こどものあそび環境デザイン 柏書房 1998 p. 12-14

参考文献

- 文部科学省 「早寝早起き朝ごはん」国民運動の推進について https://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/asagohan/
(2019年12月25日閲覧)
秋田喜代美, 他 園庭環境の調査研究—園庭研究の動向と園庭環境の多様性の検討— 東京大学大学院教育学研究科紀要第57巻 2017 p. 41-65
秋田喜代美, 他 園庭環境に関する研究の展望 東京大学大学院教育学研究科紀要第58巻 2018 p. 41-65
箕輪潤子 砂場におけるままごと遊びの発達の検討 川村学園女子大学研究紀要第21巻第2号 2010 p. 53-67
秋田喜代美 園庭を豊かな育ちの場に 質向上のためのヒントと事例 ひかりのくに 2019
木村歩美・井上寿 子どもが自ら育つ園庭整備 ひとなる書房 2018
仙田満 こどものあそび環境 鹿島出版会 2009
高山静子 環境構成の理論と実践 エイデル研究所 2014
高山静子 学びを支える保育環境づくり～幼稚園・保育園・認定こども園の環境構成～ 小学館 2017